
けいおん！ × はなまる幼稚園 雪合戦だあ！だあ！だあ！

T-K

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！×はなまる幼稚園 雪合戦だあ！だあ！だあ！

【コード】

N0724Q

【作者名】

T-K

【あらすじ】

杏「ねえお姉ちゃん！もしよかつたら杏達と雪合戦で勝負しようよー！」

唯「よーしいいよ！お姉ちゃん負けないからね！」

お正月をベースにした「けいおん！」と「はなまる幼稚園」のコラボ小説です。

初詣に行こう (前書き)

今年の正月。実家の方で無茶苦茶雪が降ったのでそれにちなんで考えたお話です。はなまる幼稚園はアニメの方に、背景キャラとして唯と梓がちやつかり登場していたという出来事をきっかけに何時かはコラボしてみたいなと思ってました。正月にはちよつと遅いですが今の内に書いておきます。

初詣に行こう

「うっわあああ、見て憂！凄いや雪だよおお！」

元旦。

初詣に行こうと憂に誘われ外に出た唯は（本当はゆっくり眠りたかったのだが妹の頼みを断るわけにはいかなかった）目の前の光景に感銘した。外は一面中銀の世界。彼方此方の家の屋根や道路もまるで御餅のような雪が厚く追いかぶさりっっている。

「うわ、ホントだ！。そう言えば一昨日からずっと降ってたっけ」

唯の後ろから現れた憂もこの状況に関心の溜息を着いた。

「ほら憂、見てみて！足跡沢山！」

唯は興奮して家の前の道路を彼方此方走り回る。憂は「お姉ちゃん危ないよ」と注意を呼びかけながらもその表情は笑顔だった。

（もうお姉ちゃんったら、あんなにはしゃいで。でも子供の頃と全然変わってないな）

憂は唯を見ながら幼稚園や小学校の頃の雪が降ったときの彼女を思い出した。あの頃の唯も雪が降ったときはこの様に何時もおおはしやぎだ。小さい頃からずっと変わってない彼女を見てると思わず微笑ましく思える。

「ほらあ、早く行こうよ」

「わかったわかった」

唯は憂の手を取って道路へ連れ出した。

同じ頃。

唯達の家とはまた少し離れた2階建てアパートの一室でまだ20代前半くらいの青年が一人炬燵の中で眠っていた。

青年の名は土田直純。つちだ なおすみ

この近所にある幼稚園、「はなまる幼稚園」の若き先生だ。普段はぐーたらでゲームばかりしており、昨夜も年を越した後はよる遅くまで趣味のゲームしていた。本当は正月には実家に帰る予定だったが、一昨日からの豪雪で、断念。今はこのように爆睡状態。

ピンポン

そこに響き渡るインターホンの音色。音は何度か繰り返され、土田は目を擦りながらようやくコタツから這い出した。

「うるさいな、正月くらいゆっくりさせてくれよ」

ぶつくさ文句を言いながらコタツの上にあった眼鏡を身に付け玄関に向かい、ゆっくりとドアを開けた。

「はいどちらさま・・・」

「つつちーっ明けおめー！ー！！」

「うわっつと！ー！！」

挨拶を言い切るやいなや、一人の少女が土田の胸元に飛びつき青年は後ろに倒れた。

年齢は見た目からして4歳くらい。金のメッシュの入った髪色とアホ毛が特徴的な女の子だ。自分の胴体よりも小さな身長少女を、両手でゆっくりと自分の体から離す土田。

「何だ杏か。急にどうした今日は？」

「ふふ〜ん 将来のお嬢さんの元に杏が一人で来てあげたんだよ〜」

「いや、そうじゃなくて。こんな寒い中一人出来たのか？」

「一緒に初詣行かないかって誘いにきたのよ」

土田が妙に大人ぶる態度を取る杏の対応に困っていると、玄関から土田よりも少し年上そうな女性が顔を出す。

「あ、桜先輩」

土田に桜うぐいと呼ばれた女性は、少女と同じように「あけおめ〜」と手を振った。

彼女は土田の高校生の時の先輩で、よき友人でもある。

で、先程土田に飛びついてきた少女が杏あんず。桜の娘だ。

土田が先生として働いている「はなまる幼稚園」さくら組の園児である。

入園した時から担任である土田の事が好きで、その想いは土田との将来設計を語る程らしく毎日今のように猛烈なアプローチを仕掛

けているのだ。

桜は杏に土田との結婚にゴーサインは出しているも本気がどうかは謎ではあるのだが、彼女なりに愛する娘を応援している事は確かだ。

「むぐ、ママってば出てこないでよー！折角杏が一人でつつちーの家まで行けるくらい大人な女性っだって所アピールしてたのに〜！」

「あはは、ごめんごめん」

杏は怒って小さな手で桜の膝をぽかぽかと叩く。彼女は「大人になること」に対して強い憧れを持っており、何時もこの様に自分を大人っぽくする為に色々試しているのだ。

「杏ちゃん、何でも一人で出来る事が大人とは限らない・・・」

「それに嘘はついちゃだめだよ？」

「ひーちゃん、こつめちゃん」

と、桜の脚の陰から杏と同じくらいの背のたけの女の子が二人、ピョコンと顔を出した。

一人は青いポニテールで、正月の晴れ着を来ておりクールな口調で杏に言う。

もう一人は黒いオカツパ頭の少女で、恥しがり屋なのか、あまり前に出ようとはしていない。

「なんだ、柊はなぶに小梅せうばいも来てたのか」

「土田先生、明けましておめでとつございます」

「お、おめでとつございます・・・」

二人の園児に行儀よく挨拶され土田も気前よく「おめでとつ」と挨拶。

この二人もさくら組の園児で、杏とは友達同士。青っぱい色の髪の毛のポニーテールで晴れを着ている子は柊といい、非常にクールで大人顔負けというぐらい様々な知識が豊富。普段はコスプレが趣味で、幼稚園でも毎度色んな衣装を着ている事がある。黒髪でおかっぱの子の方は、名は小梅といいぬいぐるみや花や動物が好きで、泣き虫で甘えん坊で照れ屋と、三人の中では一番子供らしい感受性豊かな子だ。

「ねえつつちー、一緒に初詣行こうよ」

（うーん、まいいか。どうせ正月中は暇だしな）

土田は4人の誘いに応じ、外出の準備に取り掛かった。

「あ、憂、りつちゃんが居るよ」

「ホントだ！ 澪さんも紬さんも梓ちゃんも居る！」

「どつやらあなた達の部員、勢ぞろいみたいね」

電話で誘った和とも合流し、神社に着いた唯と憂は、沢山の参拝客の中に紛れていた4人を見つけ「おーい！」と手を振って呼び止めた。

「おう唯に憂ちゃんに和。あけおめ！」

「今年もよろしくね」

律は調子よく片手を挙げ、紬も笑顔で会釈する。澪と梓もそれに続いて新年のご挨拶。

「皆さんもお宮参りに来てたんですね？」

「ああ。基本皆、ここの神社が一番家から近いからな」
「わ〜いあずにゃん明けおめ〜」
「ちよ、唯先輩、新年早々いきなり抱きつかないでくださ〜い」
「初あずにゃん分だよ〜」
「意味がわかりませんから〜」
「お前ら今年になつても変わんないなそのやり取り」

唯が梓の顔にぐりぐりと自分の頬を押し付ける光景を見て笑いあう律たち。

と、そこで参拝客の中から彼女達に呼び掛けるもの達が居た。

「梓ー、梓ー！」

「純？」

「酷いよ梓、私の事忘れて急にどっか行っちゃうなんて〜」

人混みから這い出してきた純は、梓を見るやいなやぷく〜と頬を膨らます。

「あ、ごめん純。ちよつと先輩達と出くわしたから」

「え？あ、ホントだ。どうも皆さん、明けましておめでとうござい
ます！」

「「「「おめでとつ」「「「「」

尊敬する先輩を前に純は身をピシッと伸ばして行儀よく挨拶した。

「今年もあずにゃんをどーもよろしくたのんます」

「保護者かよお前は」

唯の何時もどおりのボケに8人はクスクス笑いながら、揃って神社の方へと向かった。

「うはー、やっぱり元旦となると人も多いな」

土田が参拝客の数に圧倒している時だった。

「杏ちゃん、柊ちゃん、小梅ちゃん」

後ろから彼を呼ぶ声が聞こえて来た。

「その声は！」

「山本先生だ」

途端に後ろを振り向く杏と榎田。杏は険しい表情で、逆に土田の方は何だか嬉しそうな笑みを浮かべている。

女性は笑顔で手を振りながら歩み寄ってきた。

彼女の名は山本菜々子^{やまもとななこ}

土田と同じくはなまる幼稚園のもも組の先生。

性格はともおっとりしていて天然なところがあるが、園内ではとてもしっかり者で、園児達からは美人で優しい先生と非常に好かれている。土田が想いを寄せる女性なのだが、自分に対しての異性からの恋愛感情には非常に鈍感で、土田の事は基本良き友人・良き同僚と思っており彼の想いには全く気づいておらず、土田に好意を持っている杏にとっては恋のライバルなのである。

柊と小梅は山本先生を見たと同時にさっと頭を下げた。

「山本先生、あけましておめでとうございます」「」

「はい、おめでとう。杏ちゃんもおめでとう」

「お、おめでとうございます」

しかしライバルとは言え大人になる為には礼儀もしつかりしていなければならぬ。杏も丁寧に挨拶を返した。

「土田先生明けましておめでとうございます。今年も幼稚園の仕事、一緒に楽しく頑張りましょうね?」

「は、はい!これからもよろしくお願ひします!」

「ふふ、つつちー。元旦からそんな顔赤くしちゃって」

「な、さ、桜先輩、そんな茶化さないで下さいよ」

「え?あらホント。土田先生、新年早々風邪ですか?」

「いえいえ、そういう訳では・・・」

心配そうな表情で見つめられたもデレデレしながら頭をかく土田。杏はそれを見てぷくーっと風船の用に頬を膨らました。

「(むー、杏だって負けないんだから!)つつちーおんぶしておんぶして」

「え?しょうがないな、ホラよ?」

「わーい!」

「ふふ、杏ちゃんったら甘えんぼさん」

(へへ中々やるわね。さすが私の娘だわ)

土田におぶってもらってとても喜ぶ杏。

普段はぐーたらで「休みが多い上に同僚に若い女性が多いから」という不純な動機で幼稚園の先生になった彼だが、一人の先生としてはそれなりに責任感があり、彼なりに園児達には愛着を持っているのだ。

それにしてもおんぶと言うのは大人は自ら進んでやる事ではない気もするが、まあそこは子供だからという理由でスルーしても良いだろう。

と、神社の方へ向かう途中で7人は神社とは少し離れた広場で、同じくら組の健一と良太が互いの父親と共に雪合戦している所を発見した。

「あ、健一と良太だ」

「お？よう杏。お前等も参りに来たのか？」

「うん！」

「俺達はもう終わったぜ。今は父さん達と一緒に雪合戦してるとい。もし良かったらお前等も後で一緒にやろうぜ？」

「いいよ！私が相手してあげるんだから！」

健一と良太の誘いに杏は自分の胸を叩いて応じた。

「雪合戦・・・すごく面白そう・・・」

普段クールで落ち着いている柊も目を輝かせた。

「杏ちゃんとひーちゃんがやるって言っんなら私も」

小梅も志願する。

「ねーつつちー、つつちーもお参り終わったら一緒にやろう？」

「うーん、そう言われてもなー・・・（正月は出来れば家でゆっくりしたいんだけどなあ・・・）」

杏は土田のズボンの裾を引っ張りながら土田はどうしようか迷っていた。そんな彼に健一が口を挟む。

「良いじゃん別に、土田はどうせ家帰ってもゲームばかりなんだ

るー？」

「ギクツ・・・」

「だったら俺達と一緒に遊ぼうよ」

「・・・ねえ遊ぼう遊ぼう」

「ねえ皆、その雪合戦、先生も一緒にいいかしら？」

と、皆が一斉に土田にせがんだ時、横にいた山本先生がそう言ってきた。自分も園児達と一緒に遊びたかったのだ。

「もちろんだよ先生！」

「よし！じゃあ参拝終わったら皆で雪合戦だ！先生も一緒にやるぞ

ー！」

「・・・いえーい」

良太が山本先生の参戦をOKした瞬間、なんと解り易い男か、土田の態度がコロツと変わり元気な掛け声をあげた。

山本先生も男子児童たちも土田の参戦に大喜び。しかし、山本先生が参入すると分かった瞬間態度が変わった土田を見ていた杏は少し複雑な表情だ。

「杏ちゃん新年早々、波乱の予感・・・」

「はらん？」

柊の「波乱」という言葉が理解できず首を傾げる小梅。

「ふふ、大丈夫だよーちゃん小梅ちゃん。杏大人だもん！この位じゃへこたれないもんね！」

杏は土田の腕の上で勝気な笑みを柊と小梅に向けた。

「じゃ、健一に良太。また後でな？」

「バイバイ」

そして良太と健一は一旦土田達と別れた後、雪合戦を再開した。

互いの雪玉がぶつけ合う中、それを遠くからウキウキした表情で見つめている少女が居た。

「あれが雪合戦・・・」

それは紬だった。

とても面白そうだった。自分もやってみたい。一度でいいから皆と一緒にあんな風に雪合戦してみたい。紬はそれを見つめながら心の中でそう思った。

「おい、ムギ何してんだー？」

「あ、ごめん、すぐいくわ」

律に呼ばれ、ムギも慌てて参拝に向かった。

初対面（前書き）

気がついたらもう一月が半分過ぎてる！もう読者の皆さんはすっかり正月気分も消えてる事でしょう。今年は遅れてこの話掲載しちゃったけど、干支が何時なのかはハッキリはさせてないので、もし良ければ来年の正月にでも再びお読みになってくれたらなあと思います
^^;

初対面

神社に並ぶ参拝客の列に辿り着いた土田達。その後ろには、唯達7人が待機している。

「ねえつつちー、どうして神社にお参りに来た時鈴鳴らさなきゃいけないの〜??」

「え?・・・えーつとそれはだな・・・えーつと・・・柎パス!」
「合点承知の助」

杏に聞かれ、しばらく鈴を鳴らす理由を模索するも結局解らず観念した土田は柎にハイタッチして解答権を回す。

「鈴の音は神様にお参りに来たという事を知らせるという意味以外に、邪心を捨てて心を清めたり、振ることで自分を無心にさせたりという意味がある」

柎は人差し指を立てて杏に説明した。

「へー、小さいのによく知ってるんだなあ」

と、彼女達の後ろに並んでいた律は偶然それを聞いて人関心した声をだす。その声は柎にも聞こえ、思わず律の方を向いて照れながら返事をしてしまう。

「い、いえ・・・それでも・・・」

「ひーちゃんは何でも知ってるんだよ〜」

杏が律に言った。

「そっかあ、その着物とっても似合ってるよ」
「／／／／！」

律に着物姿を褒められ、思わず照れ隠しに柊は自分の大好きなアニメ「ぱんだねこ」に登場する体操、「ぱんだねこ体操」を踊りだす

「ぽっぽっぽっぽっぱんだねこ／／／／」

「ひーちゃん、照れてる〜」

「かわいい・・・／／／」

杏が言った。柊の踊る姿が愛嬌があり、律だけでなく後ろに居た細達も思わず微笑んだ。

「ぱんだねこかあ。そう言えば、私もお姉ちゃんと一緒に時々テレビで観てるんだあ」

「唯先輩観てるの？」

「うん、子供向けだけど見てて楽しいよ？」

「私もぱんだねこ大好きだよ〜」

「そうかあ、可愛いもんねあれ」

憂と梓との会話の輪の中に入って来る小梅の頭を、憂は撫でて上げた。

「あれ、そう言えば唯先輩何処行ったの？」

ふと、純が辺りを見回した。と、彼女達からは少し距離の離れた場所から唯の声が聞こえてきた。

「おーい皆〜！見て見て〜」

「ん？」

「うさぎ捕まえました！」

唯は自分で作ったのだろうか、雪兔を頭に乗っけて皆に見せびらかした。

「あゝもうお姉ちゃん、髪が濡れちゃうよ〜」

「こんなどうかない！ハイ！名付けて雪団子デラックス！」

憂の忠告も聞かず今度は木の枝に数個刺した丸い小さな雪玉を取り出し大はしゃぎ。

「ぶぶ、あのお姉ちゃん何か子供みたい！」

「！」

杏の一言に唯は固まった。すると直ぐ側にいた桜が杏を抱っこして湊達に言った。

「ほら杏、そんな事言わないの。ごめんなさいね、この子も朝起きた時そうとう雪見てはしゃいでたんだから。ね杏？」

「うん、ごめんなさい」

杏は桜の腕の中で皆にペコリと頭を下げる。シューンとする唯。

「子供に子供って言われたよ・・・」

「そんな気落ちしないで唯ちゃん、こんなに沢山積もってるんですもの。はしゃぎたくもなるわよ！」

「ありがとうムギちゃん」

「まあ唯が子供っぽいのは今に始まった事じゃないもんね」

「言えてる」

「言えてますね」

「そんな〜」

「なんかさ、憂のお姉さんって見てて楽しいよね？」

「ふふ、そうですね？」

純が憂に耳打ちした時、土田が杏達に呼びかけた。

「桜センパイ、そろそろ俺達の番ですよ。杏達も早く来ーい」

「「「は〜い」」」

「じゃあね貴方達」

「お先に失礼いたします」

いつの間にか杏達は神殿の前に着いていた。三人の園児は桜の言葉に合わせてペコリと7人に会釈すると、回れ右をして賽銭箱に近づく。

土田、山本、桜、杏、柊、小梅。6人は順番に賽銭を入れ、カランカランと鈴を鳴らす。

杏は鈴の音が面白くてついつい力強く何回も鳴らそうとした所を桜と土田に注意されてしまった。

「可愛い子達ですね」

後ろでその光景の一部始終を観ていた梓は紬達にそう呟く。

「どんなお願い事するのかしら？」

「きつと唯みたいに『美味しい物が沢山食べられますように』とかじゃないかしら？」

「え〜、和ちゃん私そんな大食いじゃないよ」

「そうかしら？」

追いかけた。

「では、お先に失礼します」

「ばいばい、お姉ちゃん達」

「ばいばい」

去り行く杏たちに唯達も笑顔で手を振った。そして彼女達が見えなくなった時に唯がポツリと一言。

「世も末だねりっちゃん・・・」

「ああ・・・」

「さーて、お参りも終わったし、梓ちゃん純ちゃんこの後どうする？」

「うーんどうせこの後予定無いし、憂ん家行っていい？」

「あ、じゃあ私も・・・」

「ひゃあああ！」

「！！？」

梓が口を開いた時、急に横にいた澪が悲鳴を上げた。

「急に何すんだよ律ー！」

「いやーほら、こんなに雪積もってんだからさ。なんか雪に囚んだ遊びとかやってみたいじゃん？」

「だからっていきなり背中にも雪入れる事な「ぶわっ！」！？」

と、澪が文句を言ってる内に横から律の顔に一発の雪球が飛んできた。飛んで来た方角を見ると、袖がつきうきした表情で雪玉を作っ

ていた。

「あ、ムギちゃん雪合戦？」

「ええ。雪遊びと言ったら雪合戦よね！」

「おのれムギ。不意打ちとは卑怯なり……これでもくらえ
!！」

そう言つて律は地面に積もつた雪を両手一杯に鷲掴んでムギに思い
つきり放り投げた。

「きゃ〜逃げろ〜！」

「待て〜い！」

「ムギちゃん、ここは私が援護するよ！」

「ふふ、唯め、この私を相手に無傷で済むと思つなよ〜！」

「ちよつと皆！」

「待てよ〜！」

行きよいよく駆け出した唯と律と紬の三人を和と澪が追いかける。

「私達も混ざろつか？」

「そうだね！私もお姉ちゃん達と遊びたいし！」

「純と憂が行くつて言っんなら！」

残された後輩組も5人の後を付けて行つた。

それから杏たちと唯達、二組はそれぞれ別々の場所ですばらく雪遊
び没頭した。

「うー、何か寒くなってきたよ……ねえ皆、何か暖かい飲み物か何か買いに行かない？」

「それもそうだな。んじゃさっきそこでコンビニ見かけたから、皆そこ行こうぜ」

「俺、ちょっとトイレ行つてきます」

「あ、まってつつち、杏も」

「柊も」

「小梅も」

「お前達もか？しょうがないな、じゃあ桜先輩、山本先生。この子達も一緒に連れて行きます」

「解りました、じゃあココで待ってますね」

「すぐ戻つてきなよ？」

そう言つて、土田は杏たちと一緒に神社の直ぐ近くにある公衆トイレへ、唯達はその神社の直ぐ近くにあったコンビニへ向かった（ちなみに柊はいつの間にか着物から私服に着替えていた）。

それから数分後、

「皆が買い物終わるまで雪だるまでも作つてよ」

唯はレモンティーを片手にコンビニにの前の短い階段を降りた、その時だった。

づるっ！

「うわあ!？」

唯は階段が凍っていた為足を滑らせ、そのまま前から地面に倒れ掛かる！地面が急激に顔面に迫り、唯は目を瞑ったその時。

「危ない！」

ふと誰かに受け止めてもらい、体は途中で静止した。

唯は顔を上げて恩人の顔を見ると、そこには血相をかいて自分を抱えて尻餅をついている土田の顔があった。

「いやあ、よかったー。俺が通りかかってなかったら地面に頭ぶつけてた所だったよ。大丈夫？どこもうつてない？」

「え・・・あハイ！どうも、ありがとございました！」

唯が土田に笑顔でお礼を言った時、少しはなれた場所から杏と柊と小梅が走ってくる。

「つつちー、急に走ってどうしたの・・・」

そして、土田が唯の背中を抱えて尻餅をついてる姿を見て叫んだ。

「きゃああ、つつちー何やってんのー！！」

「へ？」

杏はその光景を何かと勘違いしてその小さな腕で自分よりも大きな体の唯を必死で土田の体から放した。

「酷いよつつちー！山本先生でもない杏の知らない女の子に手出すなんて！」

「え、ええ??」

唯は一瞬杏の言っている事が理解できず、土田は大慌てで弁解した。

「違うんだよ杏!この子がさつき階段で足を滑らせて倒れかけたんだ、お前達見てなかったのか?」

「小梅たち、さつきそのガシャポン見てたから・・・」

小梅はオロオロしながら土田に言った。すると、ここでようやく杏の勘違いを理解した唯がふふと笑いながら口を開く。

「ふふ、杏ちゃんだっけ?この人が言ってる事はホントだよ?」

「柊も本当だと思う。土田先生に限って園児の子以外にモテる確立は低いと思う」

「柊、それフォローになってないんだけどな・・・」

土田はシューンと肩を落とした。唯本人や柊の言葉を聞いて杏は少し考える。

確かに土田はグラマーなお姉さんがタイプで、そういう女の人を通りかかった時はすぐ鼻の下を伸ばすけど、彼には山本先生という片思いの人が居る。見ず知らずの女の人に手を出すような人間じゃない事くらい、杏もよく知っている。それに彼は始めて入園式の日に木登りをしていて落ちかけた自分を助けてくれた優しい男で、それは自分が彼の事を好きになった切欠である出来事だった。きっとこのお姉ちゃんもそれと同じ様に助けてもらったのだろう。

そう思うと、土田を一瞬でも疑ってしまった事に反省した。

「そうだよ。つっちーは優しい人だもん、きっと以前杏を助けたみたいにそのお姉ちゃんの事も助けたんだよね?つっちー、お姉ち

「やん。変な事言つてご免なさい」

「うんうん、いいの。君さっき神社にお参りしてた子だよ？私の方こそごめんね、杏ちゃんの彼氏奪う気なんて無かつたんだよ」

「いや、杏の彼氏だなんて／＼／＼」

「え！？ちよ、君、何言つてるの！？」

「ほえ？だつてさっきお兄さんとその子の男女の関係がうんたらかんならつて。私前なんかのテレビで観た事あります。」恋愛に歳の差なんてないつて”！」

「わ、い、お姉ちゃんいい事言うて！」

「いや、でも違うから！俺と杏はそんな関係じゃないから！本気にしてるの！？」

「！?!？！つつちー、杏の事嫌いなの!?!」

「い、いやちゃんと好きだよ！でも好きって言つのはそういう意味じゃなくてちゃんと園児として……園児としてって言つても別にロリコンってわけじゃ!?!」

土田はもはや大慌て。何を言つても何かの誤解を生みそうで何を言うべきか必死で言葉を探しながら唯の誤解を解こうと努力する。

そんな3人のやり取りを柊と小梅は少し驚いた様子で伺っていた。

「このお姉さん、ある意味凄い……」

「知らない人で土田先生と杏ちゃんの事、こんな風に言ってくれる人はじめてだもんね」

唯の言葉を聞いて柊は驚いた。普通大人と幼稚園児が恋人同士等と聞いたら誰もがちよつとヤバ気な誤解を模索してしまうだろうが唯は意図も簡単に受け入れてしまった。余程心のおおらかな人なのだろうと二人は思った時、コンビ二の入り口のドアが開いて買い物袋を持った律達が現れる。

「ゴメーンお姉ちゃん遅くなって」

「唯ちゃん早く一緒に雪合戦の続きしましょ！」

「あれ？君達さつき神社に居た・・・」

「・・・こんにちは」

純が杏たちを見た時、園児達は再び皆に挨拶した。

「唯先輩、その人達とどうかしたんですか？」

「うん、実はね・・・これこれしかじか・・・」

「成る程お、そういう訳か」

「生まれたての乙女の恋心。何かいい歌詞が出来そうだな！」

「もう弁解するのも疲れてきた・・・」

「ねえねえ所でさ、お姉ちゃん達も雪合戦やってるの？」

土田はずーんと肩を落とす中、杏が紬達に聞いた。

「ん？そうよ？」

「じゃあもし良かったら杏たちと一緒にやろうよ！ココで出会ったのもなんかの縁だよ！人数が多い方が楽しいよ！」

「それはいいアイデアね！ねえ皆、この子達一緒にやりましょ雪合戦！」

紬はウキウキした表情で皆に尋ねた。

「私達は別に構わないぞ？なあ皆？」

「はい！」

律の質問に梓、純、憂、和の四人も快くOKしてくれた。

「大人数で雪合戦・・・凄く面白そう！」

「小梅もやってみたーい！」

柊は目を輝かせ、小梅もぴよぴよんとはしゃぐ。

「それなら山本先生と桜先輩がまつてる公園に行こうよ。あそこなら凄く広いからうんと動き回れるよ」

土田の提案に皆は賛成した。

「よし、じゃあ行くよー！お姉ちゃん、杏達と雪合戦で勝負だよ」

「うん！お姉ちゃん負けないからね！」

かくして、一同は山本と桜が待つ公園へと足を運んだ……

開幕（前書き）

気が付けばもう前回更新から一ヶ月過ぎようとしてる！？
予定じゃ今回で終わらせる予定だったけどいっぱいキャラが出てくるから尺と力量に限界が・・・

開幕

「へえー、じゃあ幼稚園の先生だったんですね」

「そういう事」

「私杏、よろしくね！」

「柗です」

目的地に向かいながら土田も含め、自分達がなまる幼稚園の園児である事を打ち明けた柗と杏は元氣よく片手を挙げて挨拶した。

「こ、小梅……です……」

小梅のみ、声が小さかった為皆が聞き取り辛かったが直ぐに土田が「小梅ちゃんはちょっと恥しがりやなんだ」と唯達にそう伝えフオローした。

唯も彼女達に合わせて自己紹介した。

「どうも！私平沢唯、んでこっちが妹の憂で、こちらは私の愉快な仲間たちなのです！」

「おい、何だそのいい加減すぎる紹介は！？」

「まあそりゃあこんだけ居れば省略もしたくなるよな……」

「皆、着いたよ」

むっとした表情の律を漕が宥めてるうちに一同は山本達の待つ公園に到着。この公園はサッカーのゴールや野球のコートが設置されるくらい広く、普段は地面がそれぞれ土と芝生で別けられているのだが今回ばかりは一面を覆う雪がその境界線を無くしている。

土田は大声で遠くに居る彼女達に手を振った。

「おーい、山本せんせい」

「あら、土田先生」

「土田先生！」

「え？」

彼の声に答えて手を振る山本の中に意外な声が返ってきている。

土田は彼女達に近づくとその声の主が判明する。

「なんだ、雛菊ひなぎくに優ゆうにけんじも来てたのか」

「さつきそこを3人で通りかかっていたのよ」

「ゆう君けんじ君と一緒に
お父様やお母様の新年のお土産を買いに出かけてましたの」

雛菊と呼ばれた少女は土田に大人びた口調でそう説明した。彼女もまた、はなまる幼稚園の園児である。

彼女もまたある出来事をきっかけに土田に好意を寄せる様になり、山本先生と同じく杏の恋のライバル的存在ではあるのが、別に彼女とはそこまで険悪な関係という訳ではない。というか山本先生ともライバルの筈なのだが、彼女達はライバル同士と言うよりむしろしよっちゆう一緒に遊んでいる仲のいい関係でもあるのだ。

と、ここで土田もビックリのもう一人の来客が来ていた。

「ちよっとお兄ちゃん!!」

いきなり後ろから土田の腕を引つ張る物が居た。土田は驚いて後ろを振向くと、そこには頬を膨らませた妹の土田さつきが立っていた。

「え？さつき！？」

「あ、おねえちゃんだ〜！明けおめ〜」

「あけましておめでと〜ございます」

「杏ちゃん柊ちゃん小梅ちゃん、おめでと〜」

三人の頭を優しくなでるさつき。

「さつき、どうやってココに来たんだ？確か交通機関は殆ど雪でストップしてた筈だろ？」

「知らないの？それはもう昨日のよるでお終い、今は何処も普通よ。それより、何で電話出ないのよ！どうせ遅くまでゲームして朝になつてもぐっすり寝てたいから、着信OFFにして気づかなかつたんでしょ？！」

「う……」

（見事に凶星のみたい）

さつきの予想を聞いた柊が土田を見てそう思った。さつきによると彼女は先程何度も土田に電話したが繋がらず、知り合いである桜に電話してみるとココにいる事がわかり、「じゃあさつきちゃんも来て皆よ」と誘われたんだとか。

「碌な物食べてないだろうし、こっちから様子見に来てあげたわ」

さつきは持っていたトランクを土田に見せ付けた。そのトランクは一体どれだけ中に詰め込んだのか、外見がトランク特有の長方形ではなく楕円形に変形していた。中には大量の土田の着替えやシャンプーに石鹸、カイロや肌が荒れないようにと薬用化粧水などいろいろなもの詰め込まれていた。

「そうなのか……。ありがとなわざわざ」

「うん・・・感謝してよね？」

兄に感謝されたさつきは少し頬を赤く染めながらそっぽを向いた。

「どうも師匠、明けましておめでとございます！」

「こちらこそ、けんじくん」

「小梅ちゃん、初詣おもしろかった？」

「ゆうくん・・・／＼。うん！人がいっぱいいたの！」

「あ、あの・・・」

けんじとゆうと呼ばれた男児二人も自分と交友関係のふたりに挨拶したと頃で、律が「忘れないで」言わんばかりに声をかけた。

雛菊は始めて土田の側にいる唯達の存在に気づいた。

「あら、土田先生そちらの方達は？」

「・・・・・・こんにちは〜！」「・・・・・・」

「お、土田が女の子連れてるぞ〜」

「おおホントだ〜！（何かレベル高えー！）」

唯達を指差して健一と良太が土田をちゃかした。

「つつちー、貴方いくら自分の恋が実らないからって・・・」

「お兄ちゃん・・・？」

「桜先輩、だから変な勘違いしないでくださいよ！さつきも！」

「さつきお姉ちゃんが階段で足を滑らせた時、この人が助けてくれたんです」

憂は自分達と土田達が出会った経緯を丁寧の説明する。

「そうだったの。土田先生すごいです!」

「え?あ、あはは、いやあそんな・・・/ / / /」

山本先生からも褒めてもらい照れ笑いする土田。この時、杏が黙って頬をお餅のように膨らましたのは言うまでもない。

「ども、私は杏の母です、んでこっちが」

「はじめまして。はなまる幼稚園の先生をやっています、山本と言います」

「あ、ど、どうも・・・(うわあ/ / /)」

「(結構綺麗な人)・・・/ / /」

唯達は山本に対してそう思った後、自分達も簡単に自己紹介した。

「それで、皆さんは今日はどうなされたのかしら?」

「いやあちよっと成り行きで、この子達と一緒に雪合戦しようって話になっちゃって・・・」

律が山本の疑問に答えると彼女は笑顔で返してくれた。

「まあ、それなら大歓迎よ?人数は多い方が楽しいもの。ねえどう雛菊ちゃんとけんじくんとゆう君も一緒にどう?」

「私は構いませんわ」

「俺も」

「僕も」

園児達が全員OKした所で、土田はさつきにも意見を求めた。

「そつださつき、どうせならお前も混ぜられよ?」

「え、私も?」

「さつきお姉ちゃん一緒にやるつよ雪合戦」

土田だけでなく、杏達園児達にもせがまれたさつきは断る気にもなれずとり合えず参戦をKOした。

(ふふふ、凄いわ。こんなに大勢で雪合戦できるなんて)

皆が自分達との雪合戦に承諾してくれた事に、紬は心の中でウキウキだ。

そして皆は、早速雪合戦の準備に取り掛かった。暫くすると雪合戦のルールをどうするかも話し合った。

- 1、まずそれぞれジャンケンでAとB、2チームに別れる。
- 2、それぞれのチームで代表を一人決める。
- 3、で先に相手のチームの代表に雪だまを当てた方が勝ち。
- 4、代表以外の人は何発当たってもOK。

そしてチーム別けはジャンケンで以下のように決まったのだった。

Aチーム

唯、漑、律、杏、柊、小梅、良太、純、土田(代表)

Bチーム

紬、梓、憂、雛菊、さつき、けんじ、ゆう、健一、山本(代表)

観戦

和、桜

ちなみに流石に高校生と幼稚園児が直接相手にするのは少し相手が悪いのでチームは互いに園児と高校生が交じり合う編成となっている。

桜は先程の杏達と遊んで疲れたらしく「桜：そこ！歳のせいとか思ったら怒るよ！」「和は眼鏡が壊れたら困ると言う理由で観戦する側となった。

「あ、そうだけんじくん」

「ああそうだな。皆さん、実はいい物があるんですよ」

チームモジュールも決まった所で、けんじが皆を公園内の端に連れていく。何だ何だと着いていくとそこにはある一定の距離をおいて作られた二つの鎌倉が作られていた。

「すつご〜い！」

「これ、君達を作ったの？」

唯、梓達もその出来栄えに驚きの表情だ。

「えへへ、実は昨日ゆうとココで遊んだ時に作ったんすよ」

「んじゃあさ、ココを互いのきよ・・・えつと・・・きよえん」？
・こつという基地みたいな何だっけ？

上手く言葉が思い出せない杏は一度柎に尋ねた。

「”拠点”？」

「そ、きよてん！ココを互いのチームの拠点到しよ！」

「」「賛成ー！」「」

杏の提案に皆も賛成し、二組は自分の拠点到足を向け、暫くの間は

雪球を作ったりと準備に取り掛かった。

「うーん、にしてもこれは中々強敵だねりっちゃん」

「ああ、そうかもなあ・・・」

「どうして、お姉ちゃん達？」

Aチームの鎌倉で、顎に手を当てて考え込む唯と律に杏が首を傾げて尋ねた。

「杏ちゃん、相手側のムギお姉ちゃんはああ見えて結構力持ちで私等よりか運動神経いい方なんだよ」

「何と意外な・・・」

律の話聞いて柊は一見清楚で清らかそうな顔にそんな特徴があった事に驚いた。

「そう言えば、憂もどんな事でも飲み込み早いから、相手に居る場合は結構厄介かも・・・」

純が顎に指を当てて言うと、良太が不安な表情を見せる。

「お、おいおい、それって俺等結構不利って事？」

「けど、恐れているだけでは勝負にはならない。大切なのはその強敵に立ち向かう心だと思う」

(最近の幼稚園見つけて結構カッコイイ事言っただな・・・)

以前はかなりの人見知りだった自分と同じように。

澪は少し考えた後何かを思い付いたのか、自分の直ぐ目の前の雪で何かを作り始めた。そしてそれが完成したと同時に彼女を呼びかける。

「小梅ちゃん」

「？」

そして小梅の前でしゃがみ込んである物を地面に置いてみせる。それは手の平サイズの小さな雪ウサギだ。

「わ〜かわいい！」

ぱあっと小梅の顔が明るくなる。それを見た澪は今度はポケットから先程コンビニで買ったの缶コーヒー蓋を2枚取り出し、

「ふふ、しかもコレだけじゃないんだぞ？こうして耳の葉を取ってこの蓋を代わりに取り付けると・・・ほら、ネズミになった！」

そして雪ねずみを地面に置いて片手で走ってる所表現するように動かしてあげた。小梅の表情はどんどん明るくなり、すっかり大はしやぎ。

「小梅ちゃん、お姉ちゃんと一緒に雪球作るっか？」

「うん！」

澪は小梅の頭を撫でながら自分も微笑を返した。

そして、ついに戦いの幕は切って落とされた。

開始と同時に互いのチームはすぐに予め用意していた雪球を一齐に投げつけた。

「よっしゃ行くぞお！」

「「おおー！ー！」「」

開始直後、律は杏と良太を連れてBチームの後方に居るであろう山本先生の元へと一気に駆け出した。

しかし、突如自分の目の前空間から糸が現れた。

「え！？」

「それえー！」「

そう叫ぶと雪だまを律や杏に投げつけるとまた一瞬の打ちに姿を消した。

急に何が起こったら理解に遅れる律。よく見ると彼女は雪を集めて作られた大人がしゃがんだ位の大きさの壁に隠れたのだった。実はこの壁、唯達がここに来る前に良太達が山本先生等と一緒に作っておいたのである。この雪の防壁は良太達の手によつて他の場所にも幾つも作られ、Bチームはコレに身を隠しながら前に進み自分の領地に入ってきた者に奇襲をかけるのである。

「杏ちゃん、律さん上！」

「え？うわ！？」

「わわわあー！」「

ギミックが分かった瞬間、後方から柵に叫ばれ上に視線を向ける二人。すると今度は斜上から大量の雪球の雨が彼女を襲った。Bチー
ム幼稚園組の砲撃だ。

「健一君、ユウ君、行けー！」

「えーい！」

「うひゃあー！！！」

いくら代表以外は雪球が当たってもOKとは言え、一気に数十個も自分の元へ飛んできたのでは一溜りもない。律は両手で頭を覆いながら一目散に唯達の集まる鎌倉へ戻った。

「どうだ！参ったか？」

「すごい、りっちゃん達が手も足も出なかったわ！」

「流石俺達の作った砦だ！」

「でもお姉ちゃん達が手伝ってくれお陰だよ」

「このまま相手を足取りを防ぎつつドシドシ攻めましょ！」

「はーい！！！」

良太、健一、ゆうの三人男児にノリノリで作戦を指示する紬を見て、雛菊は小声で憂と梓に話しかけた。

「あの、梓さん。あの紬さんというお方は普段からあのような陽気なお方なのですか？」

「うーん、普段はもっと落ち着いてる方だけど今回は特別かな？ムギ先輩つてきつと雪合戦した事がなかったんだと思う。だからあんなにはしゃいでるんだよ」

「はあ・・・」

雛菊は分かった様な分からない様な声を出す。

琴吹家といえば世間でも有名でありその名前は雛菊も聞いた事があるので、娘の方はきつととても女王気質な人物だと思っていたが、こうして見るとあの紬のはしゃぎぶりはまるで自分と同じ子供の様で、かなり意外な印象を受けたのだった。

(噂だけでは人は判断出来ないと言う事ですわね……)

雛菊はまた一つ人生の教訓を学んだのだった。

一方、こちらは山本の入った鎌倉を守護するさつきと憂のやり取り。

(そう言えば、小学校以来だなあ。雪合戦するなんて……)

さつきは小学の頃、よく兄土田と一緒に家の近くの公園で雪合戦していた頃を思い出した。あの時もこんな風に一面銀の世界で周りには沢山の自分と同じ子供達が愉快地に雪遊びを楽しんでいた。

(はあ……どうせならお兄ちゃんと同じチームがよかったな……)

さつきは少し残念そうに足元の小石を小さくつけた。ジャンケンで決まったと事なので仕方ない事とはわかってはいるがどうも気分が乗らないかった。真冬の空気が彼女の息を白くそめると、横に居た憂からも自分と同じ白い息が投げれこんできた。

「あゝあ・・・どうせならお姉ちゃんと同じチームがよかったなあ・・・」
「(っって同じ事考えてる?) 平沢さんだっけ、お姉ちゃんと一緒にチームになりたかったの?」
「え? あ、はい・・・遊びだっって事は解ってるけど、何だかお姉ちゃんに雪をぶつけるのが気が引けちゃって・・・」
「そうなんだ・・・」

同じ様な事は考えては居たがどうやらこの少女は自分より過保護なところがある様だ。

「さつきさんのお兄さんって普段はどんな方なんですか?」
「え? ああもう駄目駄目兄貴よ。一人暮らしする時はインスタントばっか食べてるし、通りかけの女には直ぐ鼻伸ばして見詰めて六でもないつたらありゃしない」
「そ、そうなんですか?・・・」

憂は土田の印象を聞いてちよつと戸惑った。姉を助けてくれたのだからそんなに嫌な感じはしなかったが。そう思ったのだ。

彼女の表情を見てさつきは「いけない、悪い所ばかり口ばした」と反省し、ちよつとだけ兄をフォロウする。

「あ、でもいい所もちゃんと有るからね! 幼稚園の仕事とか凄く熱心にやってるし、よくあんな大変な仕事続けられるなあって私それなりに凄いなっておもってるんだよ」

さつきの言葉を聞いて何やら憂も自分の姉を自慢したくなった様だ。

「そうなんですかあ! 実はウチの姉もギターが凄く上手なんです

よ！律さんや澪さんに紬さんに梓ちゃんと一緒にバンドやってるんです！」

「え、そうなんだ。上手いの？」

「はい！一度熱心になった物は誰にも負けられないんです！」

そんな二人の会話を後ろで聞いていた山本が割って入る。

「うふふ。二人ともお兄ちゃんとお姉ちゃんが大好きなのね」

「はい！」

（ちよ、そんなハツキリ?! / / / /）

さつきは若干動揺した。自分でも「兄が大好き」など恥しくてこんなに堂々とは言えない事をこの憂と言う子はハツキリと言っていたのだ。

彼女の表情には嘘も戸惑いも見受けられない、偽りのない透き通った目。

でもまあ、同じ兄弟好きである憂と一緒に居るのは悪い気もしないのは確かだった。

「師匠、弟子として俺も全力で向かって貰いますよ！」

「師匠って？」

けんじが自分の拳を握りしめながらそう呟くとそれを聞いた梓が尋ねた。

「柀師匠の事です。最初であった時はあんま仲良くなかったんす

けど、色々あってあの人の事” 師匠” って慕うようになったんですよ」

梓もそれを聞いて自分が唯達軽音部とはじめて出会った時の事を思い出す。

あの時は全然練習もせず殆ど遊びでばかりの先輩4人に呆れるばかりで途中で部を止めようとした事だっただけであつた。

それが今ではどういう事か、しょっちゅう弄られてるのにすっかりあの4人の中に馴染んでいる自分が居る。

彼女達はろくに練習もしないのに団結したときの演奏は何故かとても魅了するものがあつた。

練習をサボってる時は自分が葉っぱをかける役柄も今ではすっかり定着しちゃってるのだ。

幼稚園児のイザコザと自分の体験を比較するのは変かもしれないが、最初はあまり仲良くなれなかつた人物と、今ではそれなりに尊敬しているという所では、梓はけんじと自分が似たような教訓である感じがしたのだつた。

「そっかあ。お姉ちゃんもね、最初は先輩達と考え方違ってて、あんまり仲良くなかつたんだあ」

「そうだったんですか。何か俺ら似てますね？」

「うん、お互い頑張ろうね！」

「はい！」

二人は両手一杯に雪球を抱え、唯達が来るのを待ち構えた。

「へっへー！どうだ私の戦いぶりは！」

戻ってきたと同時に律は急に皆の前で自慢げに胸をそらす。

「流石はりっちゃん。いきなり最前線に飛び込むなんてカッコイイ！」

「いや威張るところでも惚れるところでもないだろ！？」

「でも、あれじゃあ近づけないよお・・・」

「うーん、まずはあの壁の多い所をどうするかだね」

小梅がおどとした表情で言うと杏も腕を組んで眉間にしわを寄せ、とそこで柊が「はい！私に考えがあります」と一声あげて手を上げる。

いつの間にか何処から持ってきたのか、彼女はガン〇ムの連〇軍などで見かける様な軍服に身を包んでいた。

「皆さん、ちょっと此方にお集まりください」

冷静な物腰で唯、漣、律、純、杏、小梅、良太、土田を鎌倉の内部の中心に集め、落ちてた真木で地面に大まかな図を描きながら自分の考えた作戦を皆に発表する。

彼女は真木で今のこの戦場の状況を大まかな図で描いた。

「向こうのチーム、ぜんぜん来ませんね」

「もつこのまま攻込んだんじゃおうよ？」

「落ち着いて皆、唯ちゃん達の事だわ。きつと何か策を練ってる筈よ……」

何時まで経っても攻込んでこない相手に痺れを切らす健一を宥めながら、慎重な表情でAチームの鎌倉を見つめる紬。

と言ったそばから戦火の炎は唐突に再点火する。

「いくぞおおおお!!」

「いやああああ!!」

「とりゃああああ!!」

「てわあああ、何かいきなり突っ込んできたんだけどお!?!」

突如としてAチームから唯、杏、良太の三人が正面から突っ込んでき、一瞬戸惑うゆうと梓。

「皆、とにかく一斉になげましょう!!」

「解りましたわ!!」

数多くの雪球が一齐に杏達を襲うも彼女達も怯む事なく紬達に雪球を浴びせた。

と、ここで紬達の後ろから憂の声の音が聞こえてきた。

「わああ、紬さん!梓ちゃん!!」

「え?!」

振り替えると、自分達の鎌倉が遠くから雪球の集中豪雨を浴びていた。しかし鎌倉の直ぐ近くには山本を守っているさつきと憂しかない。じゃあこの雪はどこから?飛んでくる方向を見たとき梓達は

厄介な物を見てしまった。

何と唯達の後ろから律、純、柊の三人が、手持ちの木の枝で作ったパチンコで雪玉を飛ばし遠距離からこちらの鎌倉に砲撃しているではないか。

「おらおらあ！バンバン撃てーい！ 漣、もつと早く雪球作れ！」
「もう人使い荒いよバカ律う！」

「ふふーん いくら柔らかい雪でもしっかり丸めて固めればこんな風に飛ばせるのよねー！」

「第二、第三照射よーい！」

「お、お願い。あんまり山本先生をいじめないでくれよな？」

後ろで悪態づく漣とこちらの攻め方に幾分不安な土田を尻目にノリノリで雪球を構え、飛ばしまくる律、純、柊。

山本は鎌倉の中からこの光景を見て呑気に相手チームを誉め焼かす

「まあ、パチンコなんてすっごく懐かしいわあ」

「山本先生そんな事行ってる場合じゃ無いですよ！？」

そんな彼女に降ってくる雪玉を何とか凌ぎながら突っ込みを入れるさつき。相手の砲撃が半端無い。このままでは此方が危うい。

「チッククショー、こうなったらこっちにも考えがあるぞ！」

「あ、健一さんどちらへ？！」

健一は雛菊の呼び止めも聞かず一度全線を離れると、鎌倉の中へ戻った。

そして底に置いてあつた自分の自分のリュックサックから子供用の野球バットを取りだした。雪遊びに飽きたら良太と野球をする気だつたのだ。そして再び外にでたかと思えば、自分に飛んでくる雪玉を見つてめてバットを構え・・・

「そりゃあ！」

一気にそれを打ち返す！

雪玉はその場で碎けるも、残りの小さな破片達は攻め混んでる唯達に降りかかり怯ませるには効果的だつた。

「よおし今度は土田だあ！」

そう言つて手持ちの雪球を軽く真上に飛ばすとそれをAチームの鎌倉めがけて豪快にフルスイングする。雪球は猛スピードで唯達、律達をかすめて一気に鎌倉の出入り口まで飛んでいき、土田の目の前で着弾！土田は「うおおお！？」と驚くも間一髪の所でそれを避けたのだつた。

「つつちー！？健ーい！」

「はい杏ちゃんこれ！」

土田を狙つた事が逆鱗にふれた杏に唯から手渡されたのは、何時の間にか作ったのか。バスケットボールサイズの大き目の雪球だつた。杏は「ありがとうお姉ちゃん！」と礼を言いながらそれを健一めがけて思いつきりぶん投げた！

「うをお！ちつくしょう杏の奴やつたなー！」

間一髪よけた健一も負けじと彼女に雪球を当てていく。

2チームの試合を外野から観戦する桜と予想以上に派手な雪合戦に呆気にとられる和。

「杏、皆頑張って〜!」

(まるで戦争ね・・・)

お互い、全く持って攻める隙を与えない支離滅裂な攻防戦だった。

この攻防戦は暫しの間続いた所で和はある疑問を抱き始めた。

(そういえば唯達のチーム、何で急に攻め始めたのかしら・・・)

何かあるわね・・・そう和が予想したが否や、彼女はBチームの防壁天国の向こう側、つまり何も壁が作られてない平面な雪の積もった地面が妙に盛り上がっている事に気がついた。そしてその盛り上がりが少しずつBチームの鎌倉へ向かっており、紬達は律達の相手をするのに夢中でその盛り上がりにも全く気づいていなかった。

「ちょ・・・もしかしてあれ・・・」

和は思った。もしやアレはAチームの誰かが雪の中を匍匐前進しているのではないかと。

そして前線に目を向けてみると何時の間にかさっきまで居た3人の仲に一人だけ居ない物が居る。

んで、その予感は案外当っちゃってたりする。

ガボオ!

「唯、参上！」

「……ええーっ!?」「」「」

先程まで律達に相手していた紬達は、自分達の直ぐ後ろで雪の中から唯が上半身を出して居る事に驚愕した。そして唯が出現した場所はBチームの鎌倉の目の前でもある。唯は雪の中を這いつくばってここまでたどり着いたのである。

そう、最初の急な特攻は紬達が少しでも鎌倉の注意を薄める為の囮あれだけの人数で攻め込めば確実に決死の前線なるし、その状況下で唯が一人前線に抜けてもそっちに気付く相手は少ないだろう。そう予想したは柊だった。だから3人を向かわせ道の真ん中で交戦状態に落とし、なおかつ律達の遠距離砲撃で状況を拡大。その隙に唯を一度相手に気付かれないように引かせて、後は彼女に隠密行動をとらせる。まさに柊の幼稚園児とは思えない大胆な発想の作戦であった。

「さつきさん、憂、急いで先輩を止めて！」

「えーい！」

「お、お姉ちゃんご免なさい！」

梓の声を合図にさつき、憂は大慌てで唯に雪球をぶつけ出すも時既に遅し。

集中砲火を浴びながらも雪から這い出した唯はいつきに鎌倉の出入り口まで向かい、中でビツクリした表情の山本先生に向かって一球なげる！

「山本先生！もーらい！」

山本は鎌倉の中で小さな悲鳴をあげた後、申し訳なさそうに笑う山本がゆっくりと鎌倉から出てきた。

「えへへ・・・当っちゃったあ」

開幕（後書き）

ちよつと色々詰め込みすぎたかな？

全〇話と決めてると中々その通りに行かない物だとつくづく思います（あれ、もしかしてこれ自分だけ？）・・・（- -1111；

でも原作はなまるよりちよつとハチャメチャな雪合戦は書いてて面白かったです・v・

次回で終われるかな？”できれば”雪の季節が終わる前には更新したい！（ってもう直ぐ3月だしなあ・・・

唯VS杏

「いやあ、にしても柊ちゃんのお陰で大勝利だな」

「ホント、流石師匠です！ 俺もまだまだですよ」

「い、いえ・・・それ程でも・・・／／／／」

律やけんじに太鼓判を押された柊は照れながら顔を伏せた。

見事勝利した唯と杏のAチーム。

休憩がてらにBチームと一緒に熱いお茶を飲み干すのであった。

「へえ、じゃあ大勢の前で演奏した事もあるんだ？」

土田は紙コップを片手に興味深そうに漣の話聞いた。

「はい。まだそこまで上手いって程でもないですけど、何度かは」

「お姉ちゃん達ギター弾けるの？」

「そうだよ、凄いでしょ？ もしよかったら杏ちゃん達もその内ある学園祭のライブ来てみてみなよ。きっと楽しいよ」

「バンド・・・面白そう／／／／」

「バンドってつかっこいいよね」

「杏も見てみたい！ ねえママ今度その「かくえんさい」があったら一緒に行こう？ 勿論つつちーと山本先生も一緒にね」

「良いわよ？ そう言われると私も貴方達の演奏観てみたな」

「うん、俺も一度そう言うの見てみたいな」

「先生もOKよ」

「ありがとうございます、きっといいライブにしてみますね！」

桜たちの言葉に梓も喜んで礼を言う。

「それにしてもこのお茶、凄くスッキリしてて飲みやすい。琴吹さん、もし良かったら私達も良いかしら？」

「勿論です」

紬の入れたお茶を口にした山本も紬から紙コップにお茶を注いでもらう。

そよ風に髪の毛を小さく靡かせて、そつと微笑みながら上品にお茶を注いでいく彼女の姿は先ほどのあの無邪気にはしゃいでいた紬とは違って変わって非常に上品な清楚で落ち着いた女性に見え、雛菊は思わず彼女に見惚れる。彼女はただ者ではない、何となくそんな気がした。

(先程の洩刺とした表情とは違って変わって、何て気品溢れる面持ちなのでしょう……)

「うん？あら雛菊ちゃん、どうしたのかしら？」

「いえ、その……。そのお茶雛菊も頂いてよろしいでしょうか？」

「いいわよ」

紬は彼女にもコップを渡し、中のお茶を口に含んだ。

(なんと素敵なるほろ苦さ……)

「熱くない？」

「はい、とても素敵な味わいですわ」

「ありがとう、とっても嬉しいわ」

紬は雛菊に優しく笑いかけると思い出したように杏達に問いかけた。

「あそうだ、実はケーキがあるんだけど杏ちゃん達一緒に食べる？」
「『『『『『ケーキ！！』』』』」

紬は土田、山本、桜、さつきにもケーキを
杏、柊、小梅、雛菊、ゆう、けんじは紬からケーキと言う単語を聞いた瞬間、目を星の様に光らせ、せつせと紬の側に集まり紬からシ
ョートケーキを受け取る。

「あれ、そう言えば良太君と健一君は？」

「純ちゃんも居ないよ？」

「ああ、あの三人ならあそこで鬼ごっこしてるよ？」

「まだまだ遊び足りないんですって」

土田とさつきが指差した方向を山本と憂が見ると、確かに遠くで純
が園児二人を追いかけてまわしている。どうやら彼女が鬼の様だ。

紬はそんな三人に大声でケーキを食べるか聞いて見た。

「おい良太、ケーキだつてよ？」

「え、マジ？金髪のおねーちゃん、俺達の方も取つといてよ〜！」

「いいわよ〜」

「『よっしゃー』」

「待て〜！」

「やべ、健一逃げるぞ！」

「おらーお姉ちゃんこっちこっちー」

「ぜえ・・・ぜえ・・・んもう、あなた達少しは休んだらどう？あ、

紬先輩私の方もお願いしまーす！」

そう叫び終わると純は息を切らせながら疲れ知らずな男児二人を再
びお追いかける。

「っていつかムギちゃん、初詣に来たのにどうしてそんなにいっぱい持って来てるの？」

園児達が非常に美味しそうに笑いながら食べる中、唯はふと細にたずねた。

「唯ちゃんの家遊びに行こうとしてたの。元旦だと思って準備してたの」

「成程、それで新年祝おうと思ったたら作りすぎちゃったって事ね？」

「ふふ、まあ、そうなんです」

桜に凶星をさされ思わず照れ笑い。

「良いじゃない。美味しい事に変わりはないんだし」

「うんそうだねさわちゃん・・・」

隣に居るさわ子の言葉に唯も同感に思い再びお茶に手を付ける・・・

「・・・って、さわ子先生！何時の間に!?!?!」

桜高組は突然のいつの間にか直ぐ側に居るさわ子の存在に飛び上がって後ずさりする。

はなまる組も「誰だこの人？」くらいの反応を示す。

「何よ、そんなに驚く事無いじゃない」

「いや驚きますよ普通に!?!」

「何で何時も登場がそんな唐突なんですか!?!」

(って何時もお!?)

確か唯達が1年時の時のクリスマス会もさわ子はこんな登場だった気がする。

澁の言葉を聞いた梓はその時居合わせて無かったのでさわ子が何時もこんな登場をしているのかと勘違いした。

そんな彼女達をよそにさわ子は初対面の土田達に自己紹介をはじめ

「あ、すみません申し遅れました。私、桜ヶ丘高校の教師をしています山中と言います」

「どうもこちらこそ。はなまる幼稚園のしてる山本といいます」

「同じく土田です、よろしく!」

「よろしく」

さわ子は土田と山中、桜にお淑やかに笑いかける。この表情をみて美人に弱い土田はついつい顔を赤くする。杏とさつきはそれぞれの思いを胸に彼を見る。

(うわぁなんて綺麗な人だ。山本先生にも引けを取らない位だ / /)

「んもう。お兄ちゃんったら、また鼻の下伸ばして・・・」

「いいなあ。杏も何時かあんなに美人になってつつちーに振りむか
れたいよ」

「ちツチツツチ、騙されちゃダメだよお二人さん、ホントのさわ
ちゃんはあんなんじゃないやなくてもつと・・・」

「田井中さくくん?何か言ってた?」

「ギクツ!!」

「?」

「どうしたのお姉ちゃん?」

「いやあ、べ、別に!！」

さわ子の本性を口に出そうとした律は硬直した。口に出そうとした瞬間さわ子の心の眼が形相で自分を睨んだ気がしたからだ。

「山中さん?」

「おほほ、何でもありませんわ」

一瞬さわ子が視線を別の方向に移したので不思議に思った山本を、さわ子はさらりと受け流した。

「でもここに居るって事はさわちゃんも初詣言っただよね? 何お願いしたの? やっぱり恋愛?」

「お、お姉ちゃんそれは余り言わない方が・・・」

「え!恋愛! 杏も恋愛についてお願いしたよ」

唯が恋愛と言う言葉を口にした瞬間、さわ子は急に悲しそうな表情になる。

彼女の言う通り願ったのは恋愛に関する事ではあるが確か去年のくじでは恋愛運が芳しく

なく、先程のくじも・・・

さわ子は目に涙を浮かべてるのを見られないように唯達から顔をそむけた。

「な、何でも良いじゃないそんなの・・・」

「大丈夫だよ!お姉さん美人だもん、きつといい人見付かるよ!」

「恋愛、焦り過ぎは禁物」

「お姉さん頑張って」

(幼稚園児に慰められる私って一体・・・)

「何か、唯より出来た子達な気しないか?」

「・・・」

「同感です・・・」

(こんな綺麗な人でもそんな悩みが・・・恋愛って難しいよなあ)

杏達に慰められ少し複雑そうなさわ子の姿を見て律、梓、土田はそれぞれの思いを胸にした。

「さーてたっぷり休憩したし、皆次は何して遊ぶ？」

「うーん、えーっとね杏は何にしようかな？」

「小梅、だるまさんが転んだがやりたーい」

「柊も」

まだまだ遊ぶ気満々の唯は皆に聞いた。

「え？まだ遊ぶんですか？」

「良いじゃない梓ちゃん、今日は元旦なんだし。皆特に用事も無いと思うよ？」

「まあ、憂が言っんなら・・・」

はなまる組も桜ヶ丘組も今日は一日コレと言った予定は無い。皆、まだまだこの一面銀の世界を遊び足りない様子だ。

と、此処でさつきまで鬼ごっこをしていた純が息を切らしながら皆の直ぐ側に有るベンチに腰かける。

「す、すみません先輩、私、ちょっと此処で休憩してます・・・」

「ええー。お姉ちゃん若いのに体力無ーい」

「あのね、君達が疲れるって事知らないだけよ・・・」

「じゃあ鈴木さん。次は私とその子達と相手してあげる」

「う、うん……ありがとう……」
「小梅ちゃん、どうしたんだろう？何か、様子が変わだぞ？」

ゆうを相手にした瞬間、動揺しまくる彼女に不思議に思うとそれを近くに居た柊がその疑問に答えてくれた。

「ゆう君は小梅ちゃんの想い人なのです」

「前は告白するの時の言葉を杏が教えたんだよ！」

「告白したのか！すごいじゃんか、何て教えたんだ？」

「ふふふんそれはねえ」

「杏ちゃん、それは秘密にした方が……」

「え、何でひーちゃん？」

「いや……人の恋路はあまり口外しない方が礼儀かと……」

「うーん、それもそうかもね……」

柊は焦って杏を口止めするが、本当の理由はそうではない。

本当はまだまだ思春期真っ盛りの女子高生達の前でもいい辛かったのだ。小梅があの時ゆうに放った一言が「抱いて！」だったなんて……

一歩間違えればきつと教育問題に発展しそうで怖い。

柊からとりあえず唯達には伏せるよう頼まれ、渋々杏はその事を秘密にした。唯達はちよつとがっかりして話題を変えた。

「そう言えば杏ちゃんは土田先生の事が好きだったんだよね？」

「うん！つっちーもあんな風に以前杏の事助けてくれたんだよ！」

「そっかあ。土田先生ってかっこいいんだね！」

唯から片思いの相手を褒められて、杏はまるで自分が褒められたよ

うに嬉しくなる。

他の園児達からはつつちーはグータラだとか女好きだとかゲームばっかりだと時々散々な言葉を耳にするが彼には彼なり悪いところも良い所もある。自分はそんなつつちーの良い所も悪い所も好きだ。

現にさつきも見ず知らずの唯お姉ちゃんを助けてあげる優しい心を持っているのだから・・・

(・・・ん？待てよ?)

と、そこまで考えて杏はある事に気がついた。

それは自分も小梅も雛菊も、恋に落ちた理由がいずれも相手が「自分を助けてくれたから」だと言う事だ。

自分は木から落ちこちた所を辛うじて土田が受け取ってくれて、雛菊は履物の紐が切れた所を土田が親切にしてくれたと彼女から聞いた事がある。

小梅も自分がコケた所をゆう君が手を差し伸べてくれたところから彼女の恋は始まった。

そう言えばよくTVや漫画でもこういう類の出来事はよく恋愛に繋がる事が多い。

自分は大人だから現実と漫画の区別くらいつくとは思っているものの、現に自分も小梅も雛菊も困った時に向こうから手を差し伸べてくれた人を何時も想うようになっていく。

先程唯は土田に助けられたと言っていた。と言つ事は……

(これってもしかして……れ、恋愛”ブログ”って奴かな！
?)

恐らく杏は「恋愛”フラグ”」と言いたいのだろう。

考えすぎとは思つが、確かにそれは実際の女性もあり得るかもしれない。

只でさえ山本先生や雛菊というライバルが居るのに(とは言つ物の、内心同じ片想い同士として土田や雛菊を若干応援している筋はあるが)これ以上増えるのは自分と土田との恋愛関係(自称)にヒビが入ってしまう。

土田はとてもカッコよくて優しい人だからそんな彼から助けられれば、きっと誰でも彼の事を好きになってしまうかも！

(ど、どうしよう……もし、さっきの事で唯お姉ちゃんがつっちーの事……好きになったら……)

と言つ風に焦りを感じた杏は、意を決して唯に挑戦状をたたきつけた。

「唯お姉ちゃん！今から杏と一対一で雪合戦で決闘しよ！」

「ほえ？」

「もし杏が勝つたら、唯お姉ちゃんは杏とつっちーの恋を応援してね！」

「え、ええ??？」

自分と雪合戦する事と土田との恋愛に何の関係があるのか？突然の宣戦布告に唯は戸惑った。

だが一緒に遊びたいのだからと思いつき、直ぐに何時ものんびりした笑顔になり、

「よーしいいよー！お姉ちゃん負けないからね！」

と、腕まくりしながらノリノリで応じてくれた。

場所を公園の中心部に移した唯と杏。

杏から事の事情を聞いた柊は再び参謀役としてゲームのルールを唯と杏、そしてそれを見守る皆に説明を開始した。今度は何やらつけひげ付きの西部劇の保安官の様なコスチュームに身を包んでいる。

「こんにちは、保安官のヒイラギです。今回のルールは西部劇でよくある早撃ち勝負をイメージしたルール、名付けて「早投げ」で勝

敗を別けたいと思います。唯さんと杏ちゃんは互いに声を掛け合いながらその場の位置から3歩後ろに向けて下がり、3歩歩いた所で後ろに居る相手に向かって雪球を投げ、先に当たったほうが勝ちとなります」

柊が説明を説明し終わると唯と杏は意気揚々と自分達の配置について。互いの距離は約5メートルに位置し、一対一の勝負とは団体でやるのとは別のドキドキ感が二人の中に込みあがる。

「なんでわざわざそんなルールにするんだ？」

「何でも杏がそうしてほしいって言ったらしいよ？ それに一対一の決闘って言ったら昔から早撃ち勝負だって相場がきまつてるんですよ！」

「そ、そうか？」

土田の疑問にけんじが答える。殆どの男児は土田とはタメ口で会話するのが普通だが土田は特に気にしていない。

「そうか。(うーん、でも高校生と園児じゃ力の差がああ・・・)

平沢さん、あんまり力入れ過ぎないで投げてね？」

「オツケー土田さん」

「つつちー、今からやるのは女の意地にかけた真剣勝負なんだから、余計な事言っちゃだめー！」

「「え？」」

土田が園児相手の杏に配慮した球を投げるよう唯に促した瞬間、杏が急に土田に向かって声を張り上げた。

「そうですわよ土田先生！ これは男性の方は口を挟んではいけない女の戦いなのですわー！」

「え、ええ？」

雛菊も彼女の表情と言葉に何かを察したのか、真剣な目で土田に意見した。ライバルとは言え恋する乙女同士何か通じ合う物があったのだろう。

「さあ行くよ唯お姉ちゃん、つっちーは渡さないからね！」

(え・・・ええ？ 何の事行ってるんだろう?? ただ遊びたいだけじゃないの??)

子供らしい大きな瞳の中に炎を宿しながら見つめる杏に、唯は戸惑いを覚えるのであった・・・

「杏、フアイト」

「なんかよく分からないけど、とりあえず頑張れ」

「杏ちゃんも平沢さんもどっちも応援してるわよ」

「杏ちゃん、大丈夫かなあ・・・」

「負けたってベソかくなよ」

「大丈夫、杏ちゃんならきつと勝てますわ！」

「頑張つて」

桜、土田、山本、小梅、良太、健一、雛菊、さつき、ゆう等、はなまる組は声援を送った。

「お姉ちゃんも頑張つて」

「唯先輩、あんまり気張りすぎちゃダメですよ」

「にしても、杏ちゃんは何でまた唯に決闘なんて申し出たんだ？」

「さあ・・・」

「私もどっちも応援してるからねー！」

「まあ、唯は子供相手に熱くなったりする子じゃないから大丈夫よね？」

「ほお・・・お茶が美味しいわぁ・・・」

「そうですねえ・・・」

憂、梓、律、漣、紬、和の桜ヶ丘組もそれぞれの思いを口にす。さわ子、純も直ぐ側でお茶を飲みながら二人を見守る。

「それでは二人とも、はじめて下さい！」

皆の声援を受けながら、柊の言葉を合図に二人はまずじつと互いを見詰め合った。今からはじめる一歩一歩は、どちらかが負けるカウントダウン。一瞬の気の迷いも許さない。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

言葉を発さず、じつと相手の目を見つめあう唯と杏。二人の表情が真剣そのものな為、ギャラリーの皆でさえついつい口を閉ざした。

鳥の囀りも聞こえず、冬の風の音のみが辺りを支配している。

しばらくして、二人はクルリと互いに背を向け合った。これから3歩、歩き終え時が勝負の結末となる。

「1、2の3、で行くよ・・・」

「OK・・・」

杏の言葉に唯も頷く。二人の手には先程作っておいた小さめの雪球が握られている。

「せーの・・・1」

唯が言った瞬間互いに一步前へ進む。足を地に置いた瞬間、ズボツと雪に靴が半分埋まる。

「2・・・」

今度は杏が言った。また一步前へ出る。

いよいよコレが最後の歩み。ギャラリーの一同は固唾をのんで見守る。そして二人は最後の一步と足を進めた。

「さーーーーーんん!!!」

その刹那、体を後ろにくねらせ互いのターゲットに向かって雪球を投げた!!

のだが・・・

スカッ!!

「コッコッって外してるし!!?」「」「」

瞬間ギャラリーの一同は大きくズツこけた。杏の投げた雪球は明後日の方へ飛んでいき目標にかすりもせず、唯の方は力を入れ過ぎないようにと思いきいすぎたお陰で杏まで雪球が全く届いていないのだ。この光景に二人は「あれ〜??」「と首を傾げた。一発で勝負が決まる予定でいたのだ。

「こ、こうなつたら先に当たった方が負け！」

「望む所だ〜!!」

さっきの緊迫した空気は何処へやら。

やけっぱちになった二人はその場で地面の雪を鷲掴み互いに投げ合い、走り回る二人を、律達や土田達は呆れながらも「まあ、変にシリアスになるよりもあの方があの子達らしいな」と、しみじみ思うのであった。

「待て〜!!」

「うー！待たないよー！」

杏は唯に追いかけてまわす。

「ああもう、あんなに気張っちゃ駄目って言ったのに唯先輩ったら・

・

「と、とにかく追っぞ」

土田に続き、皆は杏と唯の後を追った。

「へえ〜、でも幼稚園の先生って大変じゃありませんか？」

「確かに大変だと思う事は何度もあります。でもその度に園児達の元気な顔を見ると、こっちも元気が沸くんですよ。山中さんも同

じ先生としてそう思いませんか？」

「ああ、それ何か解る気がします。やんちゃん子ほどほっとけないって言うか？」

さわ子と山本はお互いの世間話に花を咲かせていた。

暫くすると、杏は唯に公園の端にある大きな木の下へと追い詰められてしまった。

唯は勝利を確信した笑みを浮かべながら、ジリジリと杏に近づいた。杏も一歩また一歩と背中を後ろ向きに足を進める。そしてとうとう背中が後ろの木に付いてしまい逃げ場をなくす。

「ふっふっふ・・・もう逃げられないよお？」

「あ・・・どうしよう・・・」

唯はキラン！と目を光らせながら右手の雪球を構える。

すると・・・

「ふふふふ・・・甘いよお姉ちゃん・・・」

「何!？」

急に不適な笑みを浮かべだす杏。

「杏ね、別にただ逃げ回ってただけじゃないんだ」

得意げにそう言って、ポケットから小さな石を取り出す。唯はそれ

を見て「もしかして、それ私にぶつけるつもり!?!」と一瞬あせった杏は首を横に振った。

「今見せてあげるよ……それええ!!!」

杏はその石を自分の頭上へと思いっきり投げた。

石は雪の積もった枝にぶつかり、そして……

カツン……

どさあああ!!

「わあああ!?!?!」

その拍子に枝の間に引っかけた大量の雪達が唯の上へと落ちてきたのだった。

唯はションボリとしながら両肩、頭の雪を払った。

「わーい勝った勝ったー!!」

見事自分よりも年上の女子高生に勝利を収めた杏はその場で大はしゃぎ。

しかし

キシキシキシ……

「え?何の音?」

ふと、頭上から妙な音が聞こえ、杏は見上げた。すると何やら大量

の雪を覆いかぶさった木の枝達が軋み合っていた。どうやら先ほどまでこの木は絶妙なバランスでこの雪達を背負っていたらしい。それが杏が投げた石の衝撃で一部が崩落、そのお陰バランスを失った木の雪達は今、先程の雪達よりも大量な質量で杏達に降り注ごうとしていた。

「わ、わあ、お姉ちゃん逃げて!!」

「ええ?つてわああ!!?」

「ごごごおおおお・・・」

唯を連れて直ぐに走ろうとしたが時既に遅し。轟音と共に落ちて来た雪は、とっさに杏を抱きしめて庇った唯の上に覆いかぶさり、二人の体はすっぽりと雪に覆いかぶさってしまった。

「ゆ、唯先輩!?!」

「唯ちゃん!!」

「杏!!!!!!」

遠くからこの瞬間を見てしまった一同は駆け足で二人の埋まった場所に駆け寄り、土田とさわ子が慌てて雪を掻き分けた。

「唯!!!」

「生きてるかあ!?!」

「お姉ちゃん!!」

「杏ちゃん!!」

「杏ちゃん、大丈夫!?!」

透、律、憂、小梅、柊に留まらず他の皆も口々に二人の名前を呼んだ。

そして……

「「ぷはあ!!」」

二人の頭が雪の中から飛び出してきた。二人の無事だった事に一同もホッと胸を撫で下ろす。

「杏ちゃん、大丈夫!？」

「唯姉ちゃん……」

唯は隣に杏の頭が出ているのを確認する。

「「うん……ごめんなさい……杏のせいで……お姉ちゃん……」

「うんうん。杏ちゃんは何にも悪くないよ。ほら、一緒に出よ?」

「うん……」

雪から這い出した後、杏は自分のせいで唯を雪まみれにしてしまい罪悪感を覚え、唯に謝罪の気持ちを込めて決闘の理由を説明した。

「そっか……それで、私に決闘を……」

「うん……ごめんなさい……お姉ちゃんがつっちーの事取っちやうなんて思ったから……」

「全くつっちーたら罪作りすぎよ」

「そっだよお兄ちゃん!」

「え、ええ？ 俺のせいですか！？」

後ろで杏の話聞いた桜とさつきは土田にキツクあたる。

俯く杏に唯は彼女の前でしゃがんで話しかけた。

「杏ちゃんは早く大人になりたいんだよね？」

「え・・・うん」

「杏ちゃんは十分大人だと思うな」

「え？」

「だって、幼稚園児で恋愛してるんだもん。私なんて幼稚園の頃なんていっつもボーッしてたもん。だから杏ちゃんはその時の私よりずっとずっと大人だと思うなあ」

「本当！ 杏、大人だと思う？」

「うん！」

唯は何時も通り笑って見せると杏も自然に笑顔になり、嬉しくて思わず土田に飛びついた。

「恋愛か、私等もそろそろ考えた方が良いかな？」

「おいおい律、何幼稚園児に対抗意識燃やしてるのさ？」

「別に燃やしてる訳じゃない。あ、なんだ澪。もしかして私に先越されたらと心配してるのか？」

「ち、違う。別にそんなんじゃない」

「澪ちゃんは、りっちゃんが取られちゃうのが心配なのよね」

「な、何でそうなるんだよムギい！？」

（出来ればお姉ちゃんに恋人が出来たら寂しくなるな・・・）

（憂さん、もしかしてまた私と同じ事考えてるのかな？・・・）

憂とさつきは少々寂しげな想いを胸に秘める。

彼女達にとつてはもう少し自分の兄弟から離れたくないようだ。
少し自分に安心が出来た杏は唯にちよつとした質問をする事にした。

「あ、そうだ。一つ聞いてもいい？」

「なに？」

「唯お姉ちゃんは好きな人居ないの？」

「居るよ」

「ええ！！！？」

余りも予想だにしなかった唯の返答に桜が丘組は騒然とした。特に憂が一番動揺を隠し切れない。

「だだだだだ、誰？ だれなのお姉ちゃん、どんな人！！！」

「ふふふ……それはね……」

そう言つて唯は自分の携帯を取り出し、携帯の画面を皆に見せた。
そこに移っているのは……

「ジャーーーーーン！！」

「……………つてそれギータ^{ギター}太じゃん！！」「」「」

ほぼピツタシのタイミングで桜ヶ丘組とはなまる組の突込みが唯に入つたのだつた。

それから皆は、先程雪合戦に参加しなかった者達も含め、寒さも忘れて日が暮れるまでおおいに雪遊びを楽しんだ。

公園には大人も子供関係なしに何処からも元気に笑いあう声が皆を包む見込む。

今日は元旦。

願わくは、

来年も皆がこれだけ笑いあえる、

素敵な一年になります様に。

おわり

一同 「あああああああああああああ！！！！！」
全員雪に埋もれ、頭だけ雪からだす。

漣 「もうちよっと考えて行動しろよ馬鹿律！（ゴッソーン！）」

律 「痛あー！！」

唯杏 「さー！ー！ーむ！ー！ーいよ！ー！ー！！！！」

ミーティング

唯 「もー！ー！くつ寝！ーとー、おしよーがつー」

律 「お正月には餅着いてー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！
ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！
ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！
卒業式も入学式も終わったとるわー！ー！（怒）」

紬 「りっちゃん落ち着いて〜（><）」

土田 「まあまあ、作者もそれなりに事情があつたんだよ」

杏 「とか言つて季節ネタつてその時期に合わせて書かないと読んでも
くれる人居ないよ？」

さわ子「確かに作者も一時期は「この時期に完結するなんて季節外れも甚だしい」って理由で、来年の正月までこの作品ほったらかしにしようか迷ってたらしいけど・・・」

梓「そういえば、コラボ作品って今回初めてじゃないですか？」

和「そういえばそうね？」

柊「『けいおん!』の出演者の皆さん、この度はどうもお疲れ様でした(ぺこり)」

唯「うん! 『はなまる』の皆とも一緒に出演出来て楽しかったよ(^^)」

小梅「こらぼってな〜に〜?？」

山本「他の漫画やアニメの出演者が一緒になって出てくる話の事よ」

小梅「ええ! じゃあ小梅、「パンダ猫」とコラボした〜い」

杏「私も! 杏もね好きな漫画やアニメの人と会ってみたく〜い!」

さつき「まあまあ杏ちゃんん気持ちも解るけど・・・」

純「問題はこれからも他の作品を書ける程の力量があるかどうかよね?」

憂「いっぱいキャラ出すのって結構大変だもんね」

良太「つつかさあ、登場人物多すぎじゃね?」

健「あ、それ俺も思った！ あんまりキャラ多すぎるとどっついても”くうき”って人ができるっばいぜ？」

和「私、雪合戦に参加してないし……」

ゆう「僕もあんまり……」

雛菊「私も対した活躍はしてませんわ？」

桜「いやいや、和ちゃんは眼鏡壊したくないって理由があったし、ゆう君は小梅ちゃんに手を差し伸べて上げたりする所があって、雛菊ちゃんはいちを雪合戦に参加してたしまだ良いわよ。私の方が見せ場無かったわね」

土田「でも俺をいびってた所は楽しんでましたよね？」

桜「さあ、どうかしら？ まあ作者も最後のシーンは子供も大人も関係なしに兎に角皆で楽しくって感じの閉めしたかったらしいわよ」

さわ子「って言うか私は何しに出てきたの！？ ただ山本先生と「同じ先生同士のやり取りがやりたい」ってだけで出して、おみくじの恋愛運微妙でそれを唯ちゃんにおちよくられて杏ちゃん達に慰められと扱い酷すぎ！ 作者は私の事嫌いなの！？」

杏「お姉さん可愛そう」

山本「どうも平沢さんだったらああいう話の流れにするだろうと思っただけで書いたそうですよ？」

唯「ヒドイ・・・私あんな鈍感な女じゃないもん・・・」

律（アニメでさわちゃんが教師になった理由聞いた時を思い出せよ
唯・・・）

漣「うーん、でもコレは皆で作者に猛講義に言った方が良いな」

杏「よしー！じゃあ皆で”じつぎ”行こつよー！」

一同「サンセー！ー！」

桜「あ、まって皆その前に大事な事を忘れてるわー！」

柊「そう言えばそうでしたね」

唯杏「じゃあ皆一緒に・・・」

一同「読んでくださった方、どうもありがとうございましたー！！」

律「おらあああ、作者何処だ~~~~~！！！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0724q/>

けいおん！×はなまる幼稚園 雪合戦だあ！だあ！だあ！

2011年9月13日07時35分発行